

歴史を語る建物たち

庄内編
(第9回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

東田川文化記念館（鶴岡市藤島）



鶴岡市藤島庁舎からほど近い東田川文化記念館は、旧東田川郡役所、旧東田川郡会議事堂、旧東田川電気事業組合倉庫で構成されている。本稿では、いずれも明治時代の建築で県指定有形文化財（昭和63年）となっている、旧郡役所（写真中央）、旧郡会議事堂（写真左）について紹介する。

慣れなかった椅子業務

明治11年、郡区市町村編成法が制定されると、山形県は11郡に分けられ、それぞれ郡役所が置かれた。そのうちの一つ、旧東田川郡は、現在の鶴岡市藤島地域、羽黒地域、櫛引地域、朝日地域、庄内町、三川町の一部、酒田市の一部を行政区域とし、藤島村（当時）に郡役所が置かれた。郡役所の役割は、県と町村の中間機関として、主に県知事の指揮監督下で町村を指導することであった。

ところで、明治19年に焼失した旧郡役所は洋風建築であったが、明治20年に再建された現存の旧郡役所は和風建築である。これはなぜか。

長く旧藤島町役場職員を務め、現在は東田川文化記

念館郷土研究サークルなどに所属する阿部公彦さんは、「明治の文明開化で、全国に洋風建築が建てられたが、当時の日本人はまだ椅子に座ることに慣れていなかった。それで、再建では床に座って業務ができる和風建築にしたのではないかと推測する。

旧郡役所の設計・監督は、宮大工の高橋兼吉と子の巖太郎である。特に兼吉は、山居倉庫（酒田市）や旧



昭和56年頃の旧郡会議事堂。旧藤島町議会議場の他、旧藤島町教育委員会や旧東田川郡町村組合などの事務所も置かれていた（東田川文化記念館提供）。

西田川郡役所（鶴岡市、国指定重要文化財）、善宝寺五重塔（鶴岡市）などを手掛けた名工で、和風・洋風の両建築に精通していた。

一方、旧郡会議事堂は明治36年に大改修で現在の姿となった。設計者は不明だが、こちらは洋風建築で、和風建築の旧郡役所と美しいコントラストをなしている。

保存の財源確保のために文化財に

郡制が廃止され、大正15年に郡役所（郡会議事堂）としての役目を終えた後は、さまざまな用途を経て、昭和18年から昭和59年まで、旧郡役所は旧藤島町役場として、旧郡会議事堂は旧藤島町議会議場などとして利用された。

昭和59年に現在の庁舎（議場）が完成した後、使わなくなった建物をどうするかが問題となった。当時、旧藤島町教育委員会で社会教育係長を務めていた阿部さんは、「解体か保存かで、庁内や議会でも意見が分かれたが、最初は解体の方が優勢だった」と振り返る。実際、昭和59年に町が発行した『町村合併30周年記念—藤島町この30年』には、「現時点では、旧郡役場は玄関部分を残して取り壊し、跡地を公園に整備（以下略）」と記載がある。

最終的には文化財の専門家の意見もあり、両建物とも現在地にそのまま保存することとなったが、次の問題は、「原形をとどめないほど増改築していた」（阿部さん）建物を修復するための費用であった。

約8億円かかるとされた修復費は、到底町では負担できない。そこで、県から文化財指定を受けることで、費用の半分を県に負担してもらうことにした。

昭和63年に指定を受けるまで、さまざまな苦労があったようだが、折しも旧県庁舎と旧県会議事堂が国の重要文化財に指定され（昭和59年）、昭和61年から修復工事を行っていたことから、「その流れにうまく乗ることができた」と阿部さんは話す。

著名な音楽家もコンサートを行うホール

修復工事は平成元年8月から平成8年3月まで約7年半の歳月を要した。特に、旧郡役所は建材の一本一本に番号を付けて解体し、修復しながら組み立てていく難工事であった。

修復工事が完了し、旧東田川電気事業組合倉庫を加えた東田川文化記念館が、平成8年7月にオープンした。旧郡役所は主に郷土資料館として、旧郡会議事堂は、1階を図書館、2階をホール（明治ホール）として、第2の人生を歩み出した。実は、旧藤島町にはそれまで独立した図書館がなく、図書館設置には地域住民の要望もあった。

最大200人収容できる明治ホールでは、コンサートや講演会などさまざまなイベントが行われているが、その中には、世界的な二胡演奏家である楊興新、ロシア

の天才ピアニストであるエカテリーナ・リヒテル、フルート奏者の山形由美など、アッと驚くような著名音楽家も含まれている。チケット代も、“相場”では考えられない破格の安さだ。

どうしたらこのような大物が来てくれるのか。

東田川文化記念館館長の安在彰さんは、「細い人脈」と言う。「明治ホール活動委員会の武田壮一委員長をはじめとするコンサートスタッフや、前館長らが情報を出し合いながら、関係者との接触を試み、少しでも人脈ができると、その細い人脈を駆使して“大物”にたどり着いた」と、スタッフや前館長らの手腕を話してくれた。

観光施設&公共施設として

東田川文化記念館は、基本的には鶴岡市観光連盟HPにも掲載されている観光施設である。入館無料に加え、最上川船下りや羽黒山、加茂水族館などをルートとするバスツアーの通り道にあることも手伝って、案内役も務める阿部さんは「GWなどはほとんど休みがない」とうれい悲鳴を上げる。

しかし、保存の段階で、すでに「住民が活用できる施設」にすることを目指していた。図書館の設置などはその典型である。修復費用を軽減するために文化財申請をしたと聞けば、いささか戦術的と思えるが、それも、建物の歴史的価値を後世に伝え、地域が誇りを持つ保存建築にしようという熱意の表れと考えれば、むしろ当然のことと言ってよいだろう。安在館長も、「地域住民の方々が気軽に立ち寄ってくれ、世間話で盛り上がることもある。コンサートなどのイベントにもリピーターが多い。記念館が地域に愛されていることを肌で感じる」と話す。

県内には、現存する旧郡役所や旧郡会議事堂がいくつかあるが、同じ場所にそのまま残っているのはここだけである。120年以上にわたり、藤島の歴史をじっと見守ってきたこれらの建物がもしも話せるならば、他にも聞いてみたいことがたくさんある。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



旧郡会議事堂の1階は図書館（鶴岡市立図書館藤島分館、旧藤島町立図書館）となっている。畳の部屋もあり、「お座敷図書館」として親しまれている（筆者撮影）。